

教職大学院 Newsletter

208

福井大学大学院 福井大学・岐阜聖徳学園大学・富山国際大学連合教職開発研究科 since2008.4 2026.7.4

実践し省察するコミュニティ 実践研究 福井ラウンドテーブル 2026 HYBRID (対面-Online) SUMMER SESSIONS 特集号

**実践し
省察する
コミュニティ**

Round Tables:
Summer Sessions 2026
for Reflective Practice
and Organizational Learning
in University of Fukui

For Communities of Practice and Reflection, since 2001

実践研究 福井ラウンドテーブル
2026 Summer sessions

7.4 (sat) 8:40-17:40
7.5 (sun) 8:20-14:00
福井大学総合研究棟V (教育系1号館)・総合研究棟 I
online-offline hybrid sessions with Zoom

探究する学びを実現する教師
教師の実践力を培う学校拠点
教師を支える教職大学院の実践研究

学校と大学/
実践と研究を結ぶ
新しい実践研究組織とそのネットワーク

2026.7.4-5

福井大学連合教職大学院・総合教職開発本部
福井大学大学院 福井大学・岐阜聖徳学園大学・富山国際大学連合教職開発研究科

online-offline hybrid sessions with Zoom

内容

異質な他者との出会いを通して、異質な自分と
出会う ラウンドテーブルへようこそ (2)
全体スケジュール (4)

Special Session

教職大学院改革特別フォーラム (5)
Zone A 学校 (6)
Zone B 教師教育 (7)
Zone C コミュニティ (8)
Zone D International (10)
Zone E 探究 (11)

Round Table Cross Sessions

実践し省察するコミュニティを結び支える (12)
ラウンドテーブルの歩み (14)
福井大学連合教職大学院が実践する教育改革
グローバルコミュニティへの誘い (17)
アーカイブ (19)
お知らせ (24)

2001年3月、21世紀とともに始まった実践研究福井ラウンドテーブルは、今回2026年7月の開催をもって51回を迎えます。今回のラウンドテーブルも、多様な実践と省察との出会いに満ちています。今回は、ハイブリッド(対面-Online)にて(一部はいずれかのみ)SUMMER SESSIONSを開催いたします。7月4日(土)には、教職大学院改革特別フォーラム、5つのテーマに即したZONE SESSIONS、7月5日(日)には小グループ(5~6名程度)で実践を丁寧に語り聴き合うROUND TABLE CROSS SESSIONSを行います。

この2日間が、お互いの成長を支え合い、大人も子どもも育ち合うコミュニティになることを、スタッフ一同大いに期待しております。

異質な他者との出会いを通して、異質な自分と出会う ラウンドテーブルへようこそ

福井大学連合教職大学院 笹原 未来

福井大学連合教職大学院のラウンドテーブルでは、異質な他者との出会いが数多く生まれる。一般的な研究会は、関心を共有する特定の領域や同じ職種の人々によって構成されることが多い。そのため、自分とは異なる領域で展開する実践や、その実践を営む人々と出会う機会は必ずしも多くない。それに対して、ラウンドテーブルには、様々な地域、領域、職種、世代、文化的背景をもつ人々が集う。1日目に開催されるポスターセッション、Zone ごとに行われるシンポジウムやフォーラム、そして2日目の小グループ形式での実践交流を通して、多様な人々が出会い、交わる。

異質な他者との出会いは、自分の実践をこれまでとは異なる視点や枠組みから見つめ直す機会をもたらす。先述したように、私たちは普段、自分の関心のある領域のコミュニティに参加することが多い。私自身は特別支援教育、とりわけ重度・重複障害教育のコミュニティに身を置くことが多い。重度・重複障害教育の中でも、私は、子どもと係わり手とが織りなす個別具体的な係わり合いのあり様に関心を寄せているため、子どもと係わり手との関係が埋め込まれているコミュニティや社会的な文脈は、普段は背景に沈みがちである。しかし、ラウンドテーブルには、学校教育、教師教育、コミュニティ、国際、探究、インクルーシブといった多様な Zone のもとに、教育や福祉、社会教育、地域づくりなど、様々な領域に根ざした実践が集まる。Zone のシンポジウムやフォーラムに参加せずとも、ポスターセッションのフロアを歩けば、多様な実践が各所で展開していることが目に入る。それらは、多種多様な実践の存在を示すだけでなく、自身の実践に別の角度から光を当てる鏡として作用する。普段は背景として沈んでいるものに光を当て、より広い文脈のなかで自らの実践を捉え直す契機となるのである。

さらに、2日目には、小グループの中でそれぞれの実践をじっくりと語り、聴く機会が設けられている。グループは、異なる地域、領域、職種、世代のメンバーによって構成されている。そこで、自身の

実践を共有しようとするならば、背景や実践の文脈をより丁寧に語ることが必要になる。関心や実践を共有しているメンバーの間では、自明のものとして扱われ、あえて言葉にされることのない前提や文脈をも語らなければならなくなる。すると、普段は意識されることのない前提や価値観が少しずつ姿を現してくる。それらを言葉として紡ぎ直すことを通して、私たちは自分の置かれている状況や、自身の実践の根底にある価値観に直面し、それを見つめ直すことになるのである。

かつて大学院生だった頃、オープンキャンパスに来た高校生から質問を受けたことがある。それは、「障害の重い子どもの場合、どれだけ教育をしても将来、自立した生活を送ることが難しい人もいると思う。そうした子どもたちへの教育にはどのような意味があるのか」という趣旨のものだった。批判や非難ではなく、知らないからこそ率直な問いだった。

障害の重い子どもの教育や自立をどう考えるのか。そうしたことは、障害の重い子どもの教育についての関心を共有するメンバーの間では、あえて言葉にして語られることは必ずしも多くない。なぜなら、障害の重い子どもの教育は重要であるという認識が前提として共有されているからである。実際には、障害の重い子どもの教育をなぜ重要だと考えるのか、その教育にどのような意味を見出しているのかは人によって様々であろう。しかし、おおよその方向性が共有されているがゆえに、そのことが改めて語られる機会は少ない。

異質な他者との対話によって、自分にとっての当たり前が、他者にとっての当たり前ではないことに気づく。対話の中で投げかけられる問いに向き合うことを通して、自分自身に向き合う。他者との交わりによって生じた揺らぎの中で、普段はあえて語ることのない前提や価値観を言葉として紡ぎ直すことを通して、自分の実践の輪郭や向かうべき方向性がよりはっきりと見えてくるのである。

また、ラウンドテーブルでは、日々の実践をより長い時間の流れの中で振り返ることができる。2日目のラウンドテーブルでは、60～100分という長い報告時間が用意されている。そこでは、自身の実践の要点だけを伝えては時間がもたない。長い実践の脈絡を丁寧に語ることが求められる。その中で見えてくるのは、今日を振り返り、明日へとつなぐという短いスパンの振り返りの中では見えづらい変化である。当時は係わり合いのつまずきや失敗として捉えられていたことが、長い展開の中で別の意味をもって立ち現れてくることもある。私たちは日々の実践の中で、今日を明日へとつなぐように目の前の状況に向き合うことが多い。しかし、長い時間の流れの中で実践を振り返ることによって初めて見えてくる変化や意味もある。長い報告時間は、そうした変化をつかまえるための時間でもある。

なお、ラウンドテーブルの価値は実践を語ることにだけにあるのではない。ラウンドテーブルでは、自らの実践を語るだけではなく、他者の実践をじっくりと聴く時間も大切にされている。ラウンドテーブルで出会う実践者は、普段は出会うことのない異質な他者であることが多い。相手のフィールドや実践の背景を知らないからこそ、相手の話を自分のフレームに当てはめて聴くことはできない。明日の自分に役立つ部分だけをつまみ食いするような聴き方もできない。隔たりがあるからこそ、そこで何が起きているのか、何が大切にされているのか、語られて

いることを、語られている以上に理解しようとする姿勢が求められる。そのことによって、実践の意味やその背後にある構造が見えてくる。すると、表面的な実践の隔たりを超えて、一見すると遠くにあると思われた実践と自分の実践とが、少しずつ繋がり始める。領域や分野を越えた共通の構造や課題が見えてくることもあるし、共通の問いが生まれることもあるだろう。対比の中で自身の取り組みの新たな意味が浮かび上がってくることもあるだろう。他者の実践を丁寧にたどることを通して、自分の実践が見えてくるのである。そのことはまた、自身の実践をより大きな社会的文脈の中に位置づけ直すことにもつながる。何より、一見すると遠く離れているかのように思われる実践が、実は同じ地平の上にあること、そしてその中に共通する問いや願いがあることに気づくことは、私たちを大いに励ましてくれる。

異質な他者との出会いと対話を通して自らの実践を見つめ直し、その意味や価値を改めて問い直す。そして、自らの実践をより広い世界へと開いていく。そのような営みこそが、ラウンドテーブルの醍醐味なのだと思う。

今回のラウンドテーブルにも、多様なメンバーが集うだろう。異質な他者との出会いを通して、異質な自分と出会う。

ラウンドテーブルへようこそ。

全体スケジュール

実践研究 福井ラウンドテーブル 2026 Summer sessions

7/4(sat) 8:40-17:40 (Zoom 接続開始 8:10)

Session I 教職大学院改革特別フォーラム

リーダーシップ再考 Zoom 8:40-11:00

多様な専門性を有する質の高い教職員集団の形成を促すために

Poster Session I ポスターセッション -大学生・社会人- 11:20-12:20 (対面/Zoom 接続開始 11:00)

Poster Session II ポスターセッション -児童・生徒- 13:10-14:10 (対面/Zoom 接続開始 12:50)

Session II

学校・教育・地域を考える5つのアプローチ 14:30-17:40

A 学校：「好き」を育み、学びを紡ぐコミュニティ - 学びと育ちをつなぐ- 対面/Zoom

B 教師教育：教師たちの心に火がつく時を協働探究する 対面/Zoom

C コミュニティ：持続可能なコミュニティをコーディネートする Zoom
- ゆるやかにつながり、なんとなくはじまる -

D International：International Initiatives on Collaborative Learning Zoom
- Teacher Education and Professional Development -

E 探究：学びと教のニューノーマル 対面
- 遊び心があふれる学校はどんな学校？ -

7/5(sun) 8:20-14:00

Session III Round Table Cross Sessions

実践の長い道行きを語り 展開を支える営みを聞き取る

①はじめに 8:20-8:40 ②自己紹介 8:40-9:00 ③報告 I 9:00-10:40 ④報告 II 10:40-11:40 ⑤報告 III 12:20-14:00

地域や職場で自分たちの実践をじっくり跡づけ、その省察をふまえて実践を編み直していく。地域・職場を大人同士が実践を通して学び合う協働体（コミュニティ）に変えていく。その中で一人一人が、省察的で主体的な実践者としての力を培っていく。そうした地道な取り組みが少しずつ蓄積されてきています。

試行錯誤を重ねながら大切に進められてきているそうした取り組みを、より広く伝え合い、じっくり展開を聞き取り、学び合う場を作りたいと思います。

小グループで実践の展開を聴き合います。

実践記録を土台に実践の歩みをじっくり語っていきたいと思います。心に残っている場面。言葉、表情、行為。その時々感じていたこと。ふりかえる中で見えてきたつながり。話し合いと記録づくりの中ではじめて気づいたこと。いま改めて跡づけ直して考えていること。

語られる展開に耳を傾け、活動の場面に共有し成長のプロセスを探っていきたいと思います。実践の過程をじっくり語り・聞きあう場、実践を共有して協働探究できる関係がより広く培われていくことが、その後の実践への問いの深まりを支える拠り所になると思います。

●参加申し込みが必要です。ホームページの申し込みフォームからお願いいたします。

次の URL (<https://www.fu-edu.net/story/2744>)、QRコードからも申し込み可能です。

●7/5 の session III の実践報告者を募集しています。申し込みフォームで選択ください。(6/26 締切)

●7/5 の session III の参加についてのお願い＝午前午後全日程 (8:20-14:00) の参加をお願いします。

ラウンドテーブルでは少人数で互いの実践の長い展開を聴き合い、考え合うことを目的としています。そのため 8:20-14:00 の全日程を 6 人程度の固定メンバーの小グループでの協働探究として進めます。原則として 8:20-14:00 の全日程に参加できるメンバーで進めますので、よろしくお願いいたします。プログラムの変更等があり得ます。最新情報を教職大学院HP <http://www.fu-edu.net/> でご確認ください。



←お申し込みはこちら

実践研究福井ラウンドテーブル summer sessions 2026. 7. 4-5

by FK 2025.11.11

教職大学院改革特別フォーラム

実践研究福井ラウンドテーブル2026 Summer Sessions 7月4日（土）8:40-11:00 Session I 教職大学院改革特別フォーラム （オンライン）

リーダーシップ再考 ～多様な専門性を有する質の高い教職員集団の形成を促すために～

現在、日本の教育政策の議論では、次期学習指導要領の策定に向けた基本的な考え方が整理されるのに連動して大学における教職課程と教員免許制度の改革方針が提起されています。そこでは、養成・採用・研修の各段階における教師の能力育成イメージが示され、多様な強み・専門性を有する教師たちが協働で教育実践を推進していく必要性が示されています。すなわち、子どもたちの主体的・対話的で深い学びを実装することのできる「多様な専門性を有する質の高い教職員集団」の形成が学校に求められていくのです。この「多様な専門性を有する質の高い教職員集団」の形成を促す大事な鍵が教職大学院制度の創設当初からその教員養成の目的に掲げられてきた「リーダーシップ」と言えます。

しかし、「リーダーシップ」と一口に言っても様々な像=イメージがあり、実際に現在では多様なリーダーシップ論が展開しています。そこで本特別セッションでは、実際に私たちが「多様な専門性を有する質の高い教職員集団」を形成していくために必要なリーダーシップに関する現代の考え方と理論、そして実践を話題提供し、これからの教職大学院、教員養成・教師教育で追究する必要のあるリーダーシップ像を描いていきます。

アジェンダ

08:40 - 08:50 オープニング

08:50 - 10:10 話題提供とコメント

10:20 - 10:50 ダイアローグ

10:50 - 11:00 クロージング

趣旨説明

福井大学大学院連合教職開発研究科 准教授
遠藤 貴広 氏



コーディネーター

福井大学大学院連合教職開発研究科 教授
中森 一郎 氏

話題提供 1：シェアド・リーダーシップ 若手・中堅教師による学校改善

横浜国立大学大学院教育学研究科 准教授 脇本 健弘 氏
東京学芸大学連合学校教育学研究科 小水 亮子 氏

- ・ 特定リーダーに依存しない相互作用の重要性
- ・ 若手・中堅層がいかに影響力を発揮するか
- ・ シェアド・リーダーシップがもたらす組織の柔軟性

話題提供 2 協創するコミュニティ 実践し協創するコミュニティ構造

福井大学教育学部附属義務教育学校 教諭
河合 創 氏・佐々木 庸介 氏

- ・ 義務教育学校における組織デザインの実践
- ・ 「研究企画チーム」による変革の推進
- ・ 教師が主体的に関わるコミュニティの形成

話題提供 3 LfMIにもとづく研修デザイン Leadership from the Middle

福井大学大学院連合教職開発研究科 教授
木村 優 氏

- ・ 学校組織変革コアリーダー研修の設計
- ・ ミドルからのリーダーシップの理論的背景
- ・ 研修を通じた組織変革の担い手育成

コメント リーダーシップとコミュニティ Leadership & Communities

北海道大学大学院教育学研究院 准教授
篠原 岳司 氏

共有分散型リーダーシップとLfMを横断し、地域や行政との関わりを含むエコシステムとしての学校コミュニティのあり方について示唆をいただきます。

主催 福井大学大学院連合教職開発研究科
共催 福井大学教育学部及び連合教職開発研究科FD委員会

参加申込は
こちらから▶



Zone A 学校

Zone A

子どもの主体的な学びを支えるコミュニティを共に考える

「好き」を育み、 学びを紡ぐコミュニティ

— 学びと育ちをつなぐ —

子どもたち一人一人の「好き」や「得意」を大事にし、学びや育ちのつながりも意識して、教科での学びを紡いできた小学校・中学校の実践をもとに、「好き」を育み、学びを紡ぐコミュニティのあり方を共に考えます。

ハイブリッド開催

対面会場は
90名定員

オンラインは
〆切まで受付

🌸 小学校からの話題提供

小学校に入学した子どもたちは、幼児期に様々な経験をしてきています。そうした一人一人の経験や思いを受け止めてどのようにつなぎ、教科の学びを紡いでいくことができるでしょうか。

🌿 中学校からの話題提供

異動して間もない教師が、子ども一人一人の学びや育ちの状況をじっくりとつかみ、教師の願いを織り込みながら、どのように子どもと共に学びをつくっていただけるのでしょうか。

➡ プログラム ⬅

Connection	14:25-14:40	🖥️ オンライン接続
Session 0	14:40-15:00	👥 Orientation グループでの自己紹介
Session I	15:00-16:30	Symposium 話題提供と対話を通じた問いの提起
テーマ 「好き」を育み、学びを紡ぐコミュニティ — 学びと育ちをつなぐ —		
話題提供 ● 新潟県三条市立大島小学校 教頭 笠原 知明 ● 福井市藤島中学校 教諭 佐々木 康順		
コーディネーター 福井大学教職大学院 教授 岸野 麻衣		
Session II	16:40-17:40	Cross-session 対話を通じた省察と協働探究

校種等をクロスした小グループでの対話を通して、話題提供を踏まえたそれぞれの省察を共有し、協働で探究していきます。

!! こんなことを一緒に考えます!!

一人一人の
「好き」や「得意」を
どうつなぐか？

子どもと共に
学びをつくるとは？

協働して豊かに
学び合うコミュニティを
どうつくるか？

「好き」を育み、学びと育ちをつなぎ合う実践のヒントを共に探りましょう。

👤 対面会場
(定員90名)

📍 会場の詳細は
お申込み後にご案内します

🖥️ オンライン
(Zoom配信)

お申込みはこちら

申込締切：〆切まで受付
※定員になり次第締め切ります

Zone B 教師教育

実践研究福井ラウンドテーブル2026 Summer Sessions

教師たちの心に火がつく時を 協働探究する

2026年7月4日（土）14:30 - 17:40

Session II Zone B 教師教育フォーラム

対面会場 福井大学文京キャンパス オンライン Zoom



研修観の転換への挑戦 「令和の日本型学校教育」の実現へ

全国で推進されている「研修観の転換」 独立行政法人教職員支援機構（NITS）からの提案を受け、これまでの「上位下達型・短期集中型」から「対話探究型・長期持続型」への教員研修の変革が推進されています。しかし…



校外と校内の断絶

センターでの「校外研修」の内容が、実際の学校現場での「校内研修」に結びついていない懸念。



学びの二極化

意欲的に受講する層と、最低限の「悉皆研修」のみを受講する層に分かれてしまう現状。



変革のリアリティ

果たして本当に「研修観の転換」は進んでいるのか？現場の奮闘をベースにした再考の必要性。

果たして、教師たちの学びの変革としての「研修観の転換」はうまく進んでいると言えるのでしょうか？
「校内研修」の活性化に結びつく「校外研修」をどうデザインすれば良いのでしょうか？
学校個別の状況を踏まえながら、いかにして教師たちの学びのサポートしていけば良いのでしょうか？

Zone Bではこれらの論題を参会者のみなさまの「現実の奮闘」をベースにして協働探究していきます。

アジェンダ

14:30 イン트로ダクション

14:40 実践の対話：グループワークと全体共有

15:10 話題提供：「研修のリ・デザインへの挑戦」

16:30 パネルディスカッション（ゲスト+参加者）

17:00 研修観のブラッシュアップ：どのようなトライが可能か

ゲスト

- 岡部 誠氏 板橋区立志村第一中学校 校長
- 荻原 拓氏 長野県総合教育センター 専門主事
- 高橋 吾郎氏 福井市明倫中学校 教諭・研究主任

コメンテーター

- 山下 真司氏 ベネッセ教育総合研究所 主席研究員

コーディネーター

- 木村 優氏 福井大学連合教職大学院 教授・研究科長



1. 対話による共有

「研修観の転換」に向けた各現場での実践経験をグループで共有し、課題を浮き彫りにします。



2. 事例からの示唆

先進的な取り組みを行うゲストの話題提供から、リ・デザインの具体的なヒントを得ます。



3. 実践への着火

自身のフィールドでどのようなトライができれば、研修観をブラッシュアップします。

教師たちの心に火がつく
その瞬間を、共に。

現実の困難を超えていく
「知恵」と「勇気」を分かち合う
豊かな探究の時間を過ごしましょう。

参加申込は
こちらから▶



Zone C ミュニティ

実践研究福井ラウンドテーブル2026夏

Zone C コミュニティ

持続可能な
コミュニティを
コーディネートする

ゆるやかにつながり、 なんとなくはじまる

7/4 sat

14:30-17:40

オンライン開催

ゆるやかな境界と、余白のなかで異質が混ざり合い、
その場その場であらたなつながりや営みが生まれていく。
そのようなコミュニティはどのように始まり、育まれ、続いていくのだろう。

今回のZoneCでは「越前市みんなの食堂」の取り組みに注目します。そこには、日本人も外国人も、高齢者も若者も、親子も友達も、多様な背景をもつ人々が自然に集い、それぞれのあり方のままで関わっています。食事をする人、少し立ち寄る人、手伝う人、ただその場に居合わせている人・・・関わり方があらかじめ決められていないからこそ、その余白のなかで異質が混ざり合い、あらたなつながりや営みが生まれつづけています。そんな「ゆるやかにつながり、なんとなくはじまる」場に、持続可能なコミュニティの手がかりを探っていきましょう。

●話題提供

越前市みんなの食堂：野尻富美さん・関孝夫さん・近藤恵美さん

●タイムテーブル

14:00 ~ オンライン接続開始
14:30 ~ 15:30 主旨説明・話題提供・対談
15:30 ~ 17:40 小グループ対話・全体対話
(ファシリテーターの進行で安心してお話しいただけます)

ZoneCは、地域・学校・企業・NPO・行政など、多様なコミュニティに関心を持つ人びとが集い、事例に耳を傾け、小グループで語り合います。居合わせた一人ひとりがこの場をつくっていく存在となる。そんなゆるやかなつながりのなかから、これからのコミュニティの可能性を、共に探っていければと思います。多様なみなさまとこの場をご一緒できることを、楽しみにしています。

主催：福井大学連合教職大学院

趣旨詳細



参加申込



Zone C 持続可能なコミュニティをコーディネートする（オンライン開催）

ゆるやかにつながり、なんとなくはじまる

これまで Zone C では、「持続可能なコミュニティをコーディネートする」というテーマのもと、さまざまなコミュニティと、そのなかで生きる人びと、そしてそこへ関わろうとする人びとの姿に目を向けてきました。「足羽川ふれあいマラソン」を支えるボランティアのあたたかさ。いつもとは違う場所へ踏み出し、違う景色に出会おうとする思いと、そこに生まれる「ためらい」と「勇気」。そして、コミュニティを持続させるために、世代を超えて継承しながら、新たなかたちを模索する営み。

一方で、私たちは、もっとゆるやかで、輪郭の定まらない関係の生まれ方にも心あたりがあるのではないのでしょうか。一緒にいるうちに、いつの間にかことばを交わし、気づけばその場に居場所のようなものが生まれている。誰かが明確に「つくろう」としたわけではなくても、人が集まり、離れ、また別のつながりが立ち上がっていく――。

コミュニティとは、あらかじめ形をもって存在しているものというよりも、人と人とのあいだで、そのつど立ち上がっていく営みなのかもしれません。そして、そうした営みに目を向けていくことは、持続可能なコミュニティについて考えていくうえで、大切な手がかりになるように思われます。

今回の Zone C では、「越前市みんなの食堂」の取り組みに注目します。そこには、日本人も外国人も、高齢者も若者も、親子も友達も、多様な背景をもつ人びとが自然に集い、それぞれのあり方のまま関わっています。「ここ」と「あそこ」を分ける境界はゆるやかで、食事をする人、少し立ち寄る人、手伝う人、ただその場に居合わせている人――関わり方があらかじめ決められていないからこそ、その余白のなかで異質が混ざり合い、その場その場で新たなつながりや営みが生まれています。

そのようなコミュニティは人びとのあいだでどのように始まり、育まれ、続いていくのでしょうか。「ゆるやかにつながり、なんとなくはじまる」コミュニティの萌芽について、みなさんと共に考えたいと思います。

Zone C には、地域・学校・企業・NPO・行政など、多様なコミュニティに関心をもつ人びとが集い、事例に耳を傾け、小グループで語り合います。居合わせた一人ひとりが、この場を共につくっていく存在となる――。そんなゆるやかなつながりのなかから、これからのコミュニティの可能性を、みなさんと協働で探っていければと思います。

●シンポジスト

「越前市みんなの食堂」

野尻富美さん、関孝夫さん、近藤恵美さん

●タイムテーブル

14:00～ オンライン接続開始

14:30～15:30 主旨説明・話題提供・対談

15:30～17:40 小グループ対話・全体対話

Zone D International

Saturday, July 4th, 2026 15:00 – 17:30 (Japan Time)

International Initiatives on Collaborative Learning Professional Development through Lesson Study



Hosted by The University Of Fukui, Japan

The Fukui Roundtable is held biannually in February and June. The Roundtable consists of five zones (A, B, C, D, E). Zone D International provides a platform for collaborative learning on practices and future prospects for teacher education reform inside and outside Japan.

Philosophy for Children (P4C) is a practice of dialogue in which children start with their own questions and deepen their thinking together by listening to one another's ideas. Instead of rushing to find the "right" answer, P4C values sharing questions, asking for reasons, and learning from different perspectives. In Zone D, we will use P4C as a starting point to think together about learning centered on children's voices and questions, reflective dialogue among teachers, and the creation of a community of inquiry in schools.

This Zone will consist of two sessions; Symposium and "Roundtable." In the symposium, the symposiasts will discuss a P4C lesson conducted at Wakasa High School in Japan. In the "Roundtable," educators from various countries will reflect on the Symposium and also discuss topics focused on six separate themes in Breakout Rooms. We hope that these examples will encourage you to reflect upon your own practices. Some of these sessions will also be translated into Japanese.

ZoneDでは、実践における協働的な学びのプラットフォームを提供し、国内外の教員養成の展望を拓くことを目的とし、世界各国の教育関係者と実践や学びを共有し、捉え直しを行っています。P4Cは、子どもたちの問いから出発し、互いの考えを聴き合いながら、ともに考えを深めていく対話の実践です。そこでは、すぐに答えを出すことよりも、問いを共有し、理由をたずね、考えの違いから学ぶことが大切にされます。今回のZone Dでは、P4Cの考え方を手がかりに、子どもたちの声や問いを中心にした学び、教師同士の省察的な対話、そして学校における探究の共同体づくりについて考え合います。このZoneにおいてはシンポジウムでの事例紹介とラウンドテーブルでの議論を通して、参加者自身の実践と省察が深まることが期待されます。なお、本セッションは英語での議論となりますが、日-英の通訳を行いますので、ご希望の方は、申し込みの際に通訳希望としていただき、当日は通訳用のZoomに接続するためのデバイスを別途ご用意ください。



p4c Hawaii: An Introductory Framework

< Symposiast >
Sarasa Sawada
English Teacher
Wakasa High School, Japan

< Symposiast >
Benjamin Lukey
Director of the University of Hawai'i at Mānoa's Uehiro Academy for
Philosophy and Ethics in Education, USA

< Symposiast >
Catherine Buchanan
Assistant Language Teacher
Wakasa High School, Japan

[Session I] 15:00-16:00 Symposium

<Moderator> William Tjipto, University of Fukui <Commenter> Yasmine Mostafa, University of Fukui

[Session II] 16:00-17:00 Roundtable

Following Session I, participants will reflect on the Symposium and discuss following the Themes in the Breakout Rooms:

Theme 1: P4C Lesson (日本語あり) Ben Lukey, Sarasa Sawada, & Catherine Buchanan	International Comparative Education (JICA Projects) Kelvin Chiumia & Kawashima	Teacher Community in Okuetsu, Japan Lauren Nichole Hartford
Egypt EJS Schools	Lesson Study in Tinajeros HS, Philippines Christopher Guerrero & Victoria De Gulán	Bangladesh / Bhutan Educational Development

[Sharing Roundtable Session] 17:00 – 17:20 Share and reflect on discussions during the Roundtable

[Closing] 17:20-17:30 Kyoko ISHII, University of Fukui



[Register Online at the QR Code or URL]

<https://forms.gle/LcypemqJdxP48pWT7>

(Registration closes on June 26th)

[The United Professional Graduate School of
Professional Development of Teachers, University of Fukui]

<https://www.fu-edu.net/en/>

[Contact] William Tjipto, wtjipto@u-fukui.ac.jp

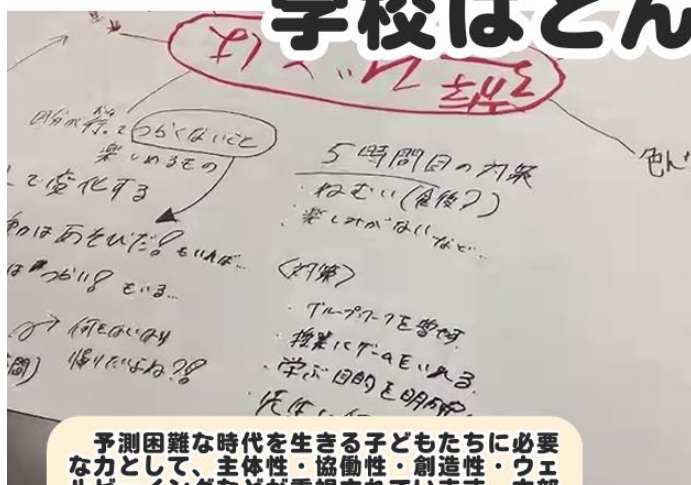
Zone E 探究

実践研究福井ラウンドテーブル2026
SUMMER SESSIONS

Zone E 学びと教えのニューノーマル

学びと教えの新しいすがたカタチ
をみんなで考える

遊び心があふれる 学校はどんな学校？



予測困難な時代を生きる子どもたちに必要な力として、主体性・協働性・創造性・ウェルビーイングなどが重視されています。文部科学省が示す「探究的な学び」や、OECDが提示する「Agency」にも、その方向性を見ることが出来ます。一方で学校では、**探究なのに、自由を感じない…一部の人が盛り上がり上っている…**そんな違和感を抱く場面もみられます。では、**子どもも大人も、もう少し「遊べる」学校はつくれないのでしょうか。**

2月のセッションでは「遊び」をテーマに対話を重ねました。そこで見えてきたのは、「遊び」が単なるレクリエーションではなく、**ものごととの向き合い方や、学びの質そのものに関わっているのではないか、という問い**でした。

今回のセッションでは、その問いをもう一度ひらきながら、「**遊び心があふれる学校**」をテーマに考えていきます。

遊び心とは、自由にふざけることなのでしょうか。余白をもつこと？ 試してみること？ 誰も答えを知らない問いを楽しむこと？ それとも、「つまらなさ」を面白がろうとする姿勢でしょうか。

「楽しい」を増やすだけでなく、「**楽しさはどこから生まれるのか**」「**楽しさは、みんなで創れるのか**」を、参加者のみなさんと一緒に問い直してみたいと思います。

話して終わりではなく、それぞれが現場や実践に問いを持ち帰り、また明日から試してみたい。そんな、**小さな「遊び心」の種を持ち帰れる時間**になれば嬉しいです。



2026年
7月4日(土) 14:30～
17:40

【開催方法】対面のみ

会場：福井大学文京キャンパス

総合教育研究棟13F大会議室

【参加人数】100名程度

※会場の都合上、定員を設けておりますが、多くのお申込みをいただいた場合には、可能な範囲で参加枠の拡充も検討しております

【zone E 参加申込】

<https://x.gd/Lo6Vs>



Round Table Cross Sessions

ラウンドテーブル

実践し省察するコミュニティを結び支える

2009.3.26

地域も職種も異なる実践者・実践研究者が集い、小グループに分かれてテーブルを囲み、5時間近く互いの実践を跡づける報告に耳を傾ける。語られる実践の展開を迫走しながら、時々の実践者の判断や配慮、実践を支える条件に問いを進める。聴き手の問いに応え、語り手は実践の状況とそこでの思考を改めて思い起こし、それを表す言葉を模索しながら語り進めていく。聴き手もその展開に学びながら、関連する自らの実践とそこでの経験・思考を語り始める。それぞれの経験が照らし合うことによって共通する構造とそれぞれの特色が浮かびあがる。

少人数で、しかも多様な専門職が集って一緒に実践の長い展開を跡づけ直すこの研究会（実践研究福井ラウンドテーブル、以下ラウンドテーブルと略す）の構成とその意味について、この会に最初から関わってきたものの一人として改めて考えてみたい。

実践の長い道行きを語り 展開を支える営みを聞き取る

一つの授業、一つのプロジェクトも、それが生み出される背景と、それが生きて働く作用の行方まで視界に入れようとするならば、はるかに長い前後の展開を跡づけることが必要となってくる。とりわけ学習者の成長のゆるやかなプロセスを焦点とする教育実践においては、そうした長い展開から目を逸らす訳には行かない。

しかし、個々の授業や実践の検討は数多く重ねられ、また他方でより長いライフヒストリーの跡づけもまた重ねられてきてはいるが、その間にある実践の持続的な展開、実践と実践の間にある調整と成長の長いプロセスへの問いは課題のままに残されてきた。たしかに、そうならざるを得ない理由がいくつも存在している。実践をともに担っているもの同士では、つねにその状況の中にいるために、問題や課題については話し合ったとしても、実践の展開と状況を子細に語る必要性が存在していない。逆にその実践の外にしているものは、その実践から学ぼうとする場合であっても、自分の実践にすぐに活かそうような具体的な手がかりを求めがちである。そして「外から」実践に迫ろうとする「研究」は、実践の持続に見合うだけの方法も枠組みも組織も準備していない。長い実践の脈絡、そこにある成長のプロセスとそれを支える編成を探るためには、これまでにない実践交流の場・実践の内と外を結ぶ新しい協働の省察の場を生み出していく必要がある。実践の歩みを振り返り、その展開を跡づけ、一人ひとりの成長、自身の実践者としての歩みを問い直そうとする語り手と、その長い展開からより深く学び取ろうとする聴き手が出会う場が必要となる。ラウンドテーブルは、実践に関わる一人ひとりがそうした語り手となり、聴き手となる場を拓こうとする取り組みとして始まる。

実践と省察のサイクルとその交流の場

長い実践の展開を省察し検討することは、日々の仕事に追われるお互いにとっては容易に実現できることではない。実践の場において、実践の展開を語り合い省察するコミュニケーションを持続的に進めていく、専門職として学び合うコミュニティ（Professional Learning Communities）の実現が中心的な課題となる。そうした実践の場での省察を支えるために、福井大学教職大学院では学校拠点での実践カンファレンスを中心に据えている。そしてそうした学校での取り組みを踏まえ、月一回の合同のカンファレンス、実践を語る会を重ね、また半年ごとに集中的に実践の展開を記録化して検討する時間を作っている。月を追って、そして半年、1年、2年とそれぞれの取り組みの足取りを確かめていくなかで、それぞれの実践者の、そしてそれぞれの職場の固有のリズムで、ゆるやかに、ときに劇的に実践が展開していくことを実感し合うことになる。時々の実践の記録やカンファレンスでの語らいを、1年、そして2年と積み重ね、その記録を、長期にわたる実践の展開過程として改めてその道行き（trajectory）・脈絡を検討し直して行くなかで、厚みのある実践の現実の展開がようやく見えてくる。あれができないこれが足りないとその時々課題を追っている目には見えない、同じところを回っているようにしか見えない実践サイクルの中

にある小さな傾斜が、長い時間の展望の中でとらえ直した時に、ゆるやかな展開として像を結んでくる。自身の見方や考え方の深まり、実践の基盤にある共同関係の展開も、そうした長期にわたる展開の中にはじめて浮かびあがってくる。

しかし、長期にわたる実践省察の意味が、その渦中では実感し難いという現実はある。そうした暗中模索の中での実践と省察を支えるためにも、実践をともに歩み語り合う仲間とともに、長い実践の展開の価値を、より広い見地からより鮮明に確かめ直す場が、どうしても必要になってくる。ラウンドテーブルは、実践展開の価値をより広い視点から確かめ直す場として、実践の場での省察、そして大学院での長期的な実践研究を支える重要な支柱となっている。実践と研究の表明の場のゆたかさ、あるいは貧困さは、それが実践の真価を問う場の一つとして働くがゆえに、日々の実践と研究の深まりを支え、逆に拘束することにもなる。交流・表明の場のあり方、その構成が問われることになる。

小グループでの共同探求と開かれた交流を結ぶ

地域を越えた実践交流はこれまでも様々な組織によって取り組まれているが、交流の広がり確保と実践の探究の深まりとは、相反する要求であることもまた確かである。ラウンドテーブルは交流と探究を両立する形を模索する中で生まれてきた。いくつかの特徴的なセッションの構成がここでは取られている。

- ① 実践の長い展開を語り、聴くことを中心に据える。
- ② そのために実践の展開を語り跡づけることの出来る時間を確保する。(1 報告 60-100 分)
- ③ 実践の展開について問い交わしながら共同探求できる少人数のグループを設定する。(6 名程度)
- ④ グループには多様な地域・分野の実践者・研究者が加わり、個々のコミュニティを越えたメンバーで実践を共有し跡づける。(学校教育・社会教育・看護・福祉・保育・自治・企業 ほか)
- ⑤ 小グループは個別の部屋に分かれず、他のグループと広場を共有した状況の中で進める。

多様な地域・領域のメンバーが加わったセッションでは、自分たちが当たり前の前提にしていたこと、重要ではあってもその領域ではだれもが共有しているが故に明確に説明することを要しない前提を改めて語る必要が生じてくる。領域を越えた、しかも実践への問いを持つ人たちに伝える言葉を探る経験は、それぞれの専門職がパブリックな表現を鍛えていく機会として重要な意味を持つことを、ラウンドテーブルの実際の積み重ねを通して私たちは実感してきている。ラウンドテーブルというセッションは、各自の領域をクロスして実践を問い深めるチャンスとなり、そして専門家の文化をパブリックなコミュニケーションと結ぶ可能性を持っている。

パブリックなコミュニケーションという課題 持続を支える記録と機構

公共的なコミュニケーションと個別のコミュニティの価値を結ぶという大きすぎる課題は、しかし、民主社会における専門職、とりわけ公教育を担う専門職にとって避けて通ることの出来ない課題である。理念としてのみ語られることの多いこの課題に、ラウンドテーブルは、実効性のある手がかりを与える可能性があるのではないかと。語り合う 34 の小さな渦、そこでの語らう声が輻輳する広場に一人の当事者として参加しながら、そして 20 名余の小さな実践交流からはじまったラウンドテーブルの 9 年の展開を振り返りながら、そう考えは始めている。

(柳澤 昌一 『教職大学院ニュースレター』 No.11 2009.3.31)

ラウンドテーブルの 4 重の意味

4 Dimensions of Round Table Cross Session for Reflection in and on Longitudinal Process of Practice

- I 長い実践の展開をともに跡づけ、省察する。
Co-reflection in and on longitudinal process of practice
- II 個々の実践コミュニティを超えて、実践の展開を探り、照らし合う。
Boundary crossing collaborative inquiries of longitudinal practice
I, II → 省察的実践者としてのモードを形成する上で不可欠のサイクル
- III 実践と実践、分野と分野を結びパブリックな省察的コミュニケーションの文化とコミュニティを培う。
Cultivating Communities of Public and Reflective Learning
- IV 省察的実践者としての専門職学習コミュニティを支える省察的機構へのチャレンジ

Challenge for Reflective Institution for Sustainable Development of Professional Learning
Communities for Reflective Practitioners

実践研究福井ラウンドテーブルの歩み 2001.3-2026.2

2001.3.17-18	春のシンポジウム ラウンドテーブル 教師の実践的力量形成をめざして 木岡一明・寺岡英男(この回は教師教育をめぐる 20 人程度の研究会であり、実践を聴き合う会ではなかった)	
2001.11.10-11	実践研究:福井ラウンドテーブル 省察的実践を支える協働(第 1 回) For Reflective Practice、Professional Development、and Organizational Learning. 第 1 回目の実践研究福井ラウンドテーブルが開催される。(参加者 20 数名)京都ユースホステル協会 福井市公民館主事 つむぎの会 ゆきんこ共同保育園 福井大学附属小学校 福井大学教育地域科学部児童館プロジェクト・探求ネットワーク	
2002.3.16-17	実践研究・事例研究ラウンドテーブル(第 2 回) 高木展郎・大田邦朗・藤原文雄・石川英志 フレンドシップ事業福井ラウンドテーブル 同日開催 探求ネットワークのラウンドテーブル ～現在に至る	
2002.7.13-14	実践研究:福井ラウンドテーブル(省察的実践を生み出す 学び合う組織を編む)(第 3 回)	
2003.3.15-16	実践研究・事例研究ラウンドテーブル(第 4 回) シンポジウム 教師教育における専門職大学院の可能性を探る 辻野昭・葉養正明	
2003.7.12-13	実践し省察するコミュニティ 実践研究:福井ラウンドテーブル(第 5 回)	
2004.3.13-14	学校改革実践研究福井ラウンドテーブル(第 6 回) 秋田喜代美ほか	
2004.7.3-4	実践し省察するコミュニティ: 実践研究福井ラウンドテーブル 2004 (第 7 回)	
	2004.8	教育のアクションリサーチ研究会が始まる(於熱海～2009)
	2005.1	実践研究東京ラウンドテーブル始まる(於早稲田大学)～現在に至る
2005.3.5-6	学校改革実践研究福井ラウンドテーブル 2005(第 8 回 参加者 100 名超) 国際シンポジウム Ann Liebermann 横須賀薫 佐藤学 於国際交流会館	
2005.7.9-10	実践研究福井ラウンドテーブル 2005 (第 9 回)	
2006.3.4-5	学校改革実践研究福井ラウンドテーブル 2006 フェニックス・プラザ (第 10 回) 田中孝彦・石川英志・新田正樹・上野ひろ美・白益民・松木健一・牧田秀昭	
2006.7.1-2	実践研究福井ラウンドテーブル 2006 (第 11 回)三輪建二・倉持伸江・松木健一・水野篤夫 兼日本社会教育学会東海北陸研究集会	
2007.3.3-4	学校改革実践研究福井ラウンドテーブル 2007(第 12 回)渡邊満・無藤隆・松木健一・新田正樹	
	2007.4	福井大学教職大学院の準備期間が始まる
2007.6.30-7.1	実践研究福井ラウンドテーブル 2007 (第 13 回)藤本 寛巳・淵本幸嗣・寺岡英男	
2008.3.1-2	学校改革実践研究福井ラウンドテーブル 2008(第 14 回)横須賀薫・新田正樹・松木健一・Jae-Hoon Yu	
2008.6.28-29	実践研究福井ラウンドテーブル 2008(第 15 回)人見久城・筒井潤子・寺岡英男・岸野麻衣・向当誠隆	
2009.2.28-3.1	学校改革実践研究福井ラウンドテーブル 2009 (第 16 回)稲垣忠彦	
2009.6.27.28	実践研究福井ラウンドテーブル 2009(第 17 回)5 つの領域: 専門職として学び合うコミュニティ (分野ごとのセッション始まる)	
2010.2.27-28	学校改革実践研究福井ラウンドテーブル 2010 (第 18 回参加者 300 名前後)鈴木寛 Catherine Lewis	
2010.6.26-27	実践研究福井ラウンドテーブル 2010(第 19 回): 学校・コミュニティ・特別支援・医療看護	
2011.2.26-27	学校改革実践研究福井ラウンドテーブル 2011 (第 20 回 参加者 300 名を超える)門脇厚司・森透	
2011.6.25-26	実践研究福井ラウンドテーブル 2011(第 21 回)松本謙一・勝野 正章・木原俊行・三輪建二	

2012.3.3-4	実践研究福井ラウンドテーブル 2012 spring sessions (第 22 回)(名称を変更する)
2012.6.23-24	実践研究福井ラウンドテーブル 2012 summer sessions(第 23 回) 参加者 450 名を超える 兼日本社会教育学会東海北陸研究集会
2013.3.2-3	実践研究福井ラウンドテーブル 2013 spring sessions(第 24 回)教師教育改革コラボレーションとの共催
2013.6.29-30	実践研究福井ラウンドテーブル 2013 summer sessions(第 25 回) 11.30-12.1 実践研究東京ラウンドテーブル 2013winter sessions(明治大学) 2.8 宇都宮大学学校活性化フォーラム(宇都宮大学)1.25 実践研究ラウンドテーブル in 静岡(静岡大学)
2014.3.1-2	実践研究福井ラウンドテーブル 2014 spring sessions (第 26 回)参加者 550 名を超える
2014.6.21-22	実践研究福井ラウンドテーブル 2014 summer sessions(第 27 回) 11.8-9 教育実践研究フォーラム in 長崎大学、11.23 実践研究ラウンドテーブル in 静岡(静岡大学) 11.22 大阪教育大学 スクールリーダーフォーラム、12.6-7 実践研究東京ラウンドテーブル(明治大学) 2.14 宇都宮大学学校活性化フォーラム、3.7 教育実践福島ラウンドテーブル
2015.2.27-3.1	実践研究福井ラウンドテーブル 2015 spring sessions(第 28 回)参加者 700 名を超える
2015.6.26-28	実践研究福井ラウンドテーブル 2015 summer sessions(第 29 回) 11.21 大阪教育大学スクールリーダーフォーラム、11.23 実践研究ラウンドテーブル in 静岡(静岡大学) 11.28-29 教育実践研究フォーラム in 長崎大学、12.6 実践研究東京ラウンドテーブル(明治大学) 12.19 教育実践福島ラウンドテーブル、2.13 宇都宮大学学校活性化フォーラム、 2.19-20 実践交流ラウンドテーブル NARA 2015
2016.2.26-28	実践研究福井ラウンドテーブル 2016 spring sessions(第 30 回)参加者 800 名を超える 生徒ポスターセッションを開催
2016.6.24-26	実践研究福井ラウンドテーブル 2016 summer sessions(第 31 回)参加者総数 547 名 7.8 記念講演&シンポジウム(和歌山大学教職大学院ラウンドテーブル) 11.12 大阪教育大学スクールリーダーフォーラム、11.23 実践研究ラウンドテーブル in 静岡(静岡大学) 11.5-6 教育実践研究フォーラム in 長崎大学、12.10-11 実践研究東京ラウンドテーブル(明治大学) 2.10-11 実践交流ラウンドテーブル NARA 2015 2.11-12 宇都宮大学学校活性化フォーラム
2017.2.17-19	実践研究福井ラウンドテーブル 2017 spring sessions(第 32 回)参加者 800 名を超える 特別企画「中等教育特別フォーラム」「保幼小教育フォーラム」を開催。省察実践学会の発足
2017.6.23-25	実践研究福井ラウンドテーブル 2017 summer sessions(第 33 回)参加者総数 566 名 10.14 信州ラウンドテーブル(信州大学教育学部附属学校園)、10.15-21 マラウイラウンドテーブル 11.11 大阪教育大学 スクールリーダーフォーラム、11.11-12 教育実践研究フォーラム in 長崎大学 12.9-10 実践研究東京ラウンドテーブル(明治大学)
2018.2.22-24	実践研究福井ラウンドテーブル 2018 spring sessions(第 34 回)参加者総数 627 名
2018.6.22-24	実践研究福井ラウンドテーブル 2018 summer sessions(第 35 回)参加者総数 476 名 10.20 信州ラウンドテーブル(信州大学教育学部附属学校園)、10.23 マラウイラウンドテーブル 11.17-18 教育実践研究フォーラム in 長崎大学、11.22-23 教育実践研究フォーラム in 奈良 12.15 実践研究ラウンドテーブル in 静岡大学 12.22-23 実践研究東京ラウンドテーブル(東京学芸大学) 2.9-10 宇都宮大学教育実践フォーラム
2019.2.15-17	実践研究福井ラウンドテーブル 2019 spring sessions(第 36 回)参加者総数 930 名
2019.6.21-23	実践研究福井ラウンドテーブル 2019 summer sessions(第 37 回)参加者総数 426 名 9.28-29 札幌ラウンドテーブル、10.23 マラウイラウンドテーブル、 11.16-17 教育実践研究フォーラム in 長崎大学、11.9 教育実践研究フォーラム in 奈良、 12.15 実践研究東京ラウンドテーブル(明治大学) 2.8-9 宇都宮大学教育実践フォーラム
2020.2.15-16	実践研究福井ラウンドテーブル 2020 spring sessions(第 38 回)参加者総数 800 名程度

	3.3-4 ウガンダラウンドテーブル
2020.6.20-21	実践研究福井ラウンドテーブル 2020 summer sessions (第 39 回) 参加者総数 500 名程度
2021.2.20-21	11.21 東京サテライト・ラウンドテーブル 11.21 関西ラウンドテーブル 実践研究福井ラウンドテーブル 2021 spring sessions (第 40 回) 参加者総数 550 名程度
2021.6.20-21	実践研究福井ラウンドテーブル 2021 summer sessions (第 41 回) 参加者総数 560 名程度 11.13 東京サテライト・ラウンドテーブル 11.21 協働探究ラウンドテーブル奈良 2021
2022.2.20-21	実践研究福井ラウンドテーブル 2022 spring sessions (第 42 回) 参加者総数 660 名程度
2022.6.18-19	実践研究福井ラウンドテーブル 2022 summer sessions (第 43 回) 参加者総数 640 名程度 8.4 宮古島ラウンドテーブル 11.26 東京ラウンドテーブル
2023.2.18-19	実践研究福井ラウンドテーブル 2023 spring sessions (第 44 回) 参加者総数 660 名程度
2023.6.17-18	実践研究福井ラウンドテーブル 2023 summer sessions (第 45 回) 参加者総数 560 名程度 8.25 岐阜ラウンドテーブル 10.28 信州ラウンドテーブル 2023 11.18 東京サテライト・ラウンドテーブル 2023 11.18-19 教育実践研究フォーラム in 長崎大学、11.23 奈良ラウンドテーブル 2024.1.27 岐阜ラウンドテーブル
2024.2.17-18	実践研究福井ラウンドテーブル 2024 spring sessions (第 46 回) 参加者総数 980 名程度
2024.7.6-7	実践研究福井ラウンドテーブル 2024 summer sessions (第 47 回) 参加者総数 485 名程度 10.14 静岡ラウンドテーブル 10.26 信州ラウンドテーブル 2024 11.16 東京サテライト・ラウンドテーブル 2024 2025.1.25 岐阜ラウンドテーブル
2025.2.22-23	実践研究福井ラウンドテーブル 2025 spring sessions (第 48 回) 参加者総数 819 名程度
2025.7.5-6	実践研究福井ラウンドテーブル 2025 summer sessions (第 49 回) 参加者総数 540 名程度 8.1 協働探究ラウンドテーブル奈良 2025 8.19 岐阜ラウンドテーブル 8.21-22 DEAL 教職員研修・宮古島ラウンドテーブル 10.18 協働探究ラウンドテーブル敦賀 2025 10.25 東京サテライト・ラウンドテーブル 2025 11.22 協働探究ラウンドテーブル奈良ー静岡 2025 2026.1.31 岐阜ラウンドテーブル 2026.1.31 琉球ラウンドテーブル 2026.2.14 八重山ラウンドテーブル
2026.2.21-22	実践研究福井ラウンドテーブル 2026 spring sessions (第 50 回) 参加者総数 841 名程度

福井大学連合教職大学院が実践する教育改革グローバル・コミュニティへの誘いざない ラウンドテーブルの広がりと深まりを通して

福井大学連合教職大学院教授 木村 優

新しいミレニアムが幕をあげたばかりの2001年3月、教師教育にかかわる20名程の実践者・研究者が福井に一堂に会し、互いの教育実践研究を交流し合う研究会が催されました。この研究会のテーマは「教師の実践的力量形成をめざして」でした。このテーマのもとで解き放たれた熱い議論が、現在、福井大学連合教職大学院が毎年2月と6月に開催している実践研究福井ラウンドテーブルを生み出しました。

あれから十数年間、福井大学連合教職大学院は福井県内外と国内外の学校や教育機関との交流・往還を積み重ねてきました。そして、21世紀の教育の実現に向けた学校と教師の挑戦を支援すべく、実践研究福井ラウンドテーブルを大黒柱にして実践コミュニティ¹を耕し続けてきました。

実践研究福井ラウンドテーブルでは会を重ねるごとに、参加者の実践報告が多様な色彩を帯びていています。ラウンドテーブルの創成期には数人の教師たちによる実践報告に限られていました。しかし現在では、教師の教育実践の報告や学校改革の挑戦過程から、教育研究者による学校との協働研究、医療・福祉における省察的实践への挑戦、学生・院生の大学（院）におけるプロジェクト学習の展開、地域の人々による学校・家庭の教育支援、海外学校での新しい教育実践への挑戦、そして、小中高生による自らの学びの軌跡についての報告に至るまで、多彩な実践が毎回のラウンドテーブルで交流されているのです。

この間、教育研究の飛躍的な前進を足がかりとしながら、「教育の質保証」と「学びの転換」を目指したさまざまな施策が矢継ぎ早に打たれるようになりました。アクティブ・ラーニング、チームとしての学校、コンピテンシー・ベース、カリキュラム・マネジメント、主体的・対話的で深い学び等々といった新しい改革用語が流布するように、学校と教師、そして子どもたちには実に多くの変化が求められています。これらの求めは、超スマート時代（Society5.0）、超AI時代、VUCA²ワールド等と呼ばれる新しい時代における、あらゆる個人とすべての社会の幸福を実現するための、私たち人類の挑戦の

現れと言えるでしょう。

このような変化の激しい時代の教育改革期では、学校、教師、子どもたちの豊かな学びと確かな育ちをサポートする機構が必要になります。学校も教師も子どもも、それぞれが孤立するのではなく、つながり合い、支え合い、協働することで変化に向けた挑戦が可能になるのです。そこで、福井大学連合教職大学院は現在、21世紀のあらゆる実践者、研究者、そして子どもたちの挑戦を支え促すための省察的機構³としての実践コミュニティとして成熟を遂げようとしています。

省察的機構としての実践コミュニティは、そのコミュニティに参加するメンバーの、文字通り「実践の省察」を支え促すことを最重要のビジョンとして描きます。このビジョンを基盤とした実践研究福井ラウンドテーブルでは、そこに参加する日本全国・世界各地の実践者や研究者は当然、それぞれ福井大学連合教職大学院とは異なるコミュニティ、あるいは複数コミュニティに属していて、それぞれのコミュニティの中で変化を生み出す新たな実践に挑戦しています。つまり、実践研究福井ラウンドテーブルは、イノバティブ（革新的）なローカル・コミュニティが集まる大きなコミュニティの「坩堝（るつぼ）」なのです。

もしも、このコミュニティの中で数多くあるローカル・コミュニティがイノバティブな実践をベースにして結びつき、そこでコミュニティ間のネットワークが広がり、協働が加速すると、いったい何が起きるのでしょうか。それはおそらく、誰も見たことのない新しい知の創造であり、新しいかかわりの現れです。この新しい「知」や「かかわり」のダイナミクスが大きくなるほど、広がるほど、現代社会を取り巻く困難や未来社会に予測される問題を突破するいくつかの「ソリューション（解）」が生み出される可能性が高まります。ただし、「知」と「かかわり」のダイナミクスを大きくし、それらのイノベーションの質と価値を深めるためには、「戦略」が必要になります。ただ指を咥えて待っているだけでは、ダイナミクスやイノベーションは起こらないのです。

福井大学連合教職大学院では、これまでの実践研究福井ラウンドテーブルの展開で結びつきを強めたいくつかのコミュニティと連携して、分散型コミュニティのデザインに着手し始めました。もしも、複数のローカル・コミュニティが共通の理念やビジョンのもとで、「実践し省察するコミュニティ」に昇華することができれば、そして、そこで互いの課題や問題を見つけ出し、それらの解決策を考え出して共有可能な「知」を蓄積することができれば、それぞれのコミュニティが分断することなく連動して各地の「挑戦」を支え合い励まし合うことが可能になると考えたためです。

すなわち、日本全国・世界各地にあるローカル・コミュニティを結びつけて、各コミュニティの相互作用による変化を生み出すために、複数の境界をまたいでメンバーが学び合うことができる分散型のコミュニティ構造をデザインしていくのです。福井大学連合教職大学院の分散型コミュニティへの挑戦とはつまり、現代社会と未来社会に生きるすべての人々の学びと育ちを支える、教育改革のグローバル・コミュニティを築く戦略なのです。

2014 年度から、福井大学連合教職大学院との連携協働に基づき、長崎、大阪、静岡、東京、宇都宮、福島でラウンドテーブルが開かれるようになりました。その後、ラウンドテーブルは奈良や長野でも産声をあげ、各地の学校の校内研修にも広がっていきます。2017 年度には福井大学連合教職大学院と JICA

との連携を基盤として、アフリカのマラウイでラウンドテーブルが始まりました。日本各地そして世界のラウンドテーブルで引き出されはじめた教師たちの教育への熱誠、子どもたちの学びへの希望、そしてすべての人々の幸福への追求が、新たな省察的機構としての実践コミュニティを各地に創発していくことになることでしょう。

福井大学連合教職大学院ではこれまでも現在も、私たちのコミュニティ、そして分散型のグローバル・コミュニティに参加くださるあなた（ピア）を求めています。ぜひ、私たちとのかかわりを通して、そして実践研究福井ラウンドテーブルを通して、21 世紀を革新する教育のあり方についてともに考え、すべての人々が幸福を追求できる未来社会をともに築いていく、この挑戦に多様多層に同行いただくと幸いに思います。

¹ あるテーマについての関心や熱意等を共有して、それぞれが所属する分野・領域の知識や技能を相互に持続的に交流し、深めていく集団や組織のこと（ウェンガー・マクダーモット・スナイダー，2002）。

² 現代社会の特徴を表す 4 つの言葉：Volatility（不安定）、Uncertainty（不確実）、Complexity（複雑）、Ambiguity（曖昧）の頭文字をとった造語。

³ コミュニティの組織学習を支え、コミュニティのメンバーの実践の省察を励ます組織＝機構のこと（ショーン，2017）



Archive — アーカイブ —

実践研究福井ラウンドテーブル 2024 Summer Sessions (Newsletter No.186)、2025 Summer Sessions (Newsletter No.198)、2026 Spring Sessions (Newsletter No.204)に参加していただいた方の報告をご紹介します。※ご所属は当時のものです。

[Newsletter No.186 \(2024.8.30\) より](#)

A Reflection on the 2024 Lesson Study Roundtable Discussion Held at the University of Fukui in Japan on 6TH July 2024

Nalikure College of Education (NCE), Malawi Richard Ngwira

On the 6th of July 2024, I had an opportunity to attend the Roundtable discussion which was organized by the University of Fukui in Japan. It was a great experience since I was given a chance to connect with some individuals from different countries with whom we shared our experiences.

The first person to present her experience was Laurine Nichole Hartford from Florida in the United States of America, working as an Assistant Language Teacher (ALT) in Japan. She talked about her background for her to become a teacher and her experience as an educator. In her presentation, she explained that despite her mother being a teacher, she had no passion to become a teacher as such she wanted to become a Defense Attorney, but eventually became a teacher. She also explained her passion in education and believed that “A good education is a foundation for a better future,” a quote from Elizabeth Warren. She also emphasized the importance of proper preparation in lesson delivery. She highlighted that the level of fear is inversely proportional to preparation. I was inspired by her passion for teaching. I learnt that the challenges she has gone through

were just similar to what we have also gone through in our educational life.

I presented my experience as educator and based on our visit in Japan. It was a great experience to learn about the Japanese education system which emphasizes inquiry-based learning. Learners are exposed to research projects while still young. The relationship between the University of Fukui and its attached school was pleasing. From the experience, we realized that at the Nalikure College of Education, we are under-utilizing the Nalikure Demonstration Secondary School. As such, it is something that we can learn to improve the situation as a way of enhancing the professional development of our teachers and even the student teachers that we train. I also had an opportunity to tell our friends from other countries that Malawi is another place which is peaceful and has many places of tourist attractions which are worth visiting. I noted that all these are in line with Malawi's vision of turning the country into an inclusively wealthy and safe, reliant nation by the year 2063. This could enhance the production of a properly trained human resource that could positively contribute to the national agenda.

I would like to express my appreciation for the idea of having the roundtables. Firstly, they provide us with the chance to hear from our fellow educators and be inspired by their experiences and challenges. Listening to others' difficulties can be encouraging, as it reminds

us that we are not alone in facing obstacles. Furthermore, roundtables offer an opportunity to recognize and appreciate our own work which we might not realize are already quite commendable.

Newsletter No.198 (2025.8.21) より

教職員研修の充実のために

鳥取県教育センター 倉田 利江子

はじめて「実践研究福井ラウンドテーブル」に参加させていただいた。今回私が参加した Zone B では、「専門職としての教師の資本と育成指標～孤立する専門職から協創する専門職へのトランスフォーラム～」をテーマに、都道府県等で用いられている教員育成指標と教員研修改革を軸として、二つの報告、情報提供があった。

福井県教育庁教職員課の遠藤正宏課長からは「福井県の教職員育成指標の更新サイクルとビジョン共有」として、福井県の教員育成指標の策定の経緯や指標を活用した教員研修のポイント等についてお話があった。福井県では、福井が求める教師像を反映させた福井県教員育成指標が策定されており、その指標を活用して教職員研修におけるPDCAサイクルが実施され、研修の評価に基づき毎年育成指標を見直しているということだった。育成指標の見直しと策定を毎年実施されていることや学校現場を意識した取組を推進していることに感嘆するとともに、福井県教育委員会として、働きやすさと働きがいの向上をめざし、チャレンジを楽しむ教員の育成を図っていると言われたことが、大変印象的だった。遠藤課長が繰り返しおっしゃっていた「現場の先生方には、自信と誇りをもって生き生きと仕事をしてほしい！」という言葉に強く共感し、自分自身の日頃の業務について省察することができた。

板橋区教育支援センターの堀内雅一統括指導主事からは、「板橋区の研修リ・デザインの挑戦板橋区教職員研修計画『授業革新』について」として、

「教育の板橋」の実現に向けた板橋区教育支援センターの具体的な取組についてお話があった。研修を見直すうえでの課題として、研修回数、教員への負担感、学校の働き方改革などが挙げられており、どこでも課題は共通していると感じた。また、実際の研修内容についても具体的に御紹介いただき、大変参考になった。「子どもの学びと教師の学びは相似形である」という考え方のもと、学校や教員が主体となって選択できる研修、実践的で効果的な研修のあり方等について、考えることができた。

話題提供後には、小グループで対話を行い、感想等を自由に出し合い、校種や立場を超えて、思いを共有することの大切さを感じた。学校現場の切実な問題に話題が及び、「子どもの学びと教師の学びは相似形である」ならば、厳しい状況にある現場の先生方にとって「主体的・対話的で深い学び」となる研修について、今後も考え続け試行錯誤し続けていくことが必要だと強く感じた。教師が「協働する専門職」から「協創する専門職」へと変化するためにも、まずは自分自身ができることを具体的に考え、地道に確実に実行していきたいと感じた。

今回参加させていただき、様々な方と対話することで自己内対話と省察がすすみ、新たな気づきを得ることを体験できた。今回得た学びを今後も生かしていきたいと思うとともに、貴重な学びの機会を与えていただいたことに感謝している。ありがとうございました。

探究の場に息づく豊かな「問い」文化

株式会社 教育と探求社 佐藤 瞬

私たち教育と探求社は、現実社会と連動して生きる力を育む探究学習プログラム「クエストエデュケ

ーション」を全国の学校に提供しています。また2023 年より福井県立高志高等学校・中学校にて教員

向け「福井探究ワークショップ」を実施し、全4回でのべ66名の先生方と共に対話や実践を行いました。そのワークショップに参加くださった先生方から口々にラウンドテーブルの質の高さを共有いただいております、私たちもいつか参加したいと願っていた場によく参加することが叶いました。

今回のZone Eのテーマは「誰もが『挑戦』できる学校はつくれるのか?」。まずは私が挑戦したいことを共有し、挑戦を阻害する要因を踏まえる形で議論は進んでいきました。最後の問い「誰もが挑戦できる学校はつくれるのか?」は白熱した議論を生み出しました。“挑戦”という概念をどう捉えるか、“誰もが”にどこまで含めるかといった言葉を洗練させることで、希望が見えてくるプロセスを味わうことができました。私のグループでは、個人の挑戦と集団(学級や学校)の挑戦とがコンフリクトを起こしたらどうしたらいいのか?との問いに向き合い話し合いを行いました。

その中で最も印象深かったのは、教師・生徒・企業という従来の立場や垣根を超えて、参加者全員が対等な立場で議論を交わしていることでした。そこには上下関係はなく、一人ひとりが探究者として真摯に向き合う姿がありました。年齢や所属を問わず、それぞれの視点から発せられる意見が交錯し、新たな気づきを生み出していく様子は、まさに学びの形

にふさわしいものだと感じました。

更に感銘を受けたのは、生徒たちの問いに対する感度の高さでした。議論の終盤、場から投げかけられた問いに対して、「この問いは少しジャンプしていますね」という発言が生徒からあったのです。この一言は、単に質問内容を受け取るだけでなく、問いの背景にある意図や文脈を深く読み取ろうとする姿勢の証左であると感じました。問いに対して一問一答的にすぐに答えを出すのではなく、問いを基にじっくりと思考を深めることが身体的・文化的に染みついていないと出てこない発想・発見だろうと感じています。

答えとは誰かが決めた外側にあるものではなく、この場にいるみんなで“応え”ていくもの、創っていくものである。探究がしっかりと根付いていく背景にはそうした認識論的な土台があることを前提にしているのだと感じました。だからこそラウンドテーブルにおいても、参加者一人ひとりが自分なりの視点を持ち、主体的に発言できるのだと合点がきました。

探究の文化が根付いたこの場での経験は、私たちにとっても大きな学びとなりました。私たちも、参加された先生方と共に、本質的な学びを起こすための“応え”を創り上げてまいりたいと思います。

Newsletter No.204 (2026.4.4) より

立ち止まり 見つめ 語り合って

伊那市立伊那小学校 小松 良介

北陸の冬には珍しく、朝から穏やかな光が差し込んでいました。さほど冷え込むこともなく、お天気に恵まれたこの日の朝、私は福井大学教職大学院のラウンドテーブルにお招きいただき、No. 49 グループに参加致しました。立場やフィールドが異なる方々と語り合う中で、自分一人では凝り固まってしまいがちな思考が、少しずつ柔らかくほぐれていくのを感じていました。

最初に報告されたのは、福井大学の滝波さんです。「見えない思いを結ぶ、その先に一思いを書き残す記録と子どもの見取りに立ち止まり、丁寧に辿り続ける省察-」というテーマで、144ページにも及ぶ記録の厚みに、驚かされました。インター先の小学校で、慣れない挨拶に戸惑いながら、常に「正解を求めてしまう自分」を厳しく問い直す彼女の姿。授

業を「何のために見ているのか」問い、言語化することで、見え方が少しずつ変わっていく過程。誠実な省察をもとにした彼女の語りは、聴いている私たちに響いていきました。生成AIが台頭し、効率や正解が急かされる現代社会においてこそ、彼女のようにその都度立ち止まり、学び続ける姿勢こそが、教師の根幹だと改めて教えられた気がします。地に足をつけて、学びに向かう真摯な眼差しに、私自身も背筋が伸びる思いでした。

続いて、大和郡山市立矢田南幼稚園の大内先生による「つながりや深まりが生まれる命との出会い～たまたま(偶然)から広がる世界」の報告が行われました。大内先生が大切そうに、そして嬉しそうにカバンから取り出した園児の製作物。なんとも初々しい文字から、「書きたい」「伝えたい」子どもたち

のエネルギーが伝わってきました。ヤゴとの暮らしの中で、子どもたちの興味は水やエサ、お家へと次々に広がっていきます。特に感動的だったのは、トンボが羽化する瞬間です。園児が飛ばした紙飛行機の先に、偶然にも羽化を始めたばかりのトンボがいました。その「たまたま」を逃さず、子どもたちと一緒に「生まれたんや!」「早く来て!」「今、お尻が震えた!」と感動を分かち合う姿は、教師と子どもが「感情共同体」としてつながった瞬間のように思えます。大内先生の慈愛に満ちた雰囲気がグループ全体をもあたたかく包み込みました。

聴き手の永野先生による問い返しから議論が盛り上がり、ファシリテーターの岸野先生が私たちの想いをつなぎ、まとめてくださいました。次第に皆さ

んが前のめりになって語り合ううちに、私の実践報告の時間も含め、100分という対話の時間はあっという間に過ぎていきました。私のこれまでの歩みを受容的に聞いてくださり、また同時に新たな課題をいただいた、実りある時間でした。

全てのプログラムを終えて会場の外へ出ると、時刻は午後二時を回っていました。気温は20度近くまで上がり、上着がいらなほどでした。私の心は、清明の気持ちで満たされていました。学びは一人で完結するものではなく、仲間と語りながら深まっていきます。この地でいただいた多くの示唆を糧に、私もまた、新たな子どもたちと共に、新しい物語を紡いでいきたいと決意を新たにしています。

新たな価値に自分から出合いに行く

福井市下宇坂小学校 校長 長谷川 容子

SessionⅡ<Zone A>テーマ「子供の主体的な学びを支えるコミュニティ」に参加しました。夏に引き続き2回目です。今回のシンポジウムもとても良かったです。かつて、道徳の研修を受けたときに聞いた「授業で考えたことを家に帰って反芻して自分の中で成熟させる。そんな授業でありたい」を思い出しました。そんな学びの時間になりました。

長野県栄村立栄中学校の田中先生からは「やらない自由を問い直す」、福井大学附属義務教育学校後期の赤尾先生からは「誰一人取り残さない全員参加の授業を目指す(保健体育のダンス)」の実践発表がありました。私は、主体性の大切さについて分かっていたつもりでいたことを痛感しました。それは、どう育てるのかという問いに対する具体的な答えをもっていないと気付いたからです。「主体的に学びに取り組む態度」について、観点別学習評価の枠組み、すなわち、「知識・技能を獲得したり、思考・判断・表現力を身に付けたりすることに向けた粘り強い取組を行おうとしている側面」と「粘り強い取組を行う中で、自らの学習を調整しようとする側面」の2点からしか捉えていませんでした。現学習指導要領が実施された年に、児童生徒の何を見取るべきかの議論を繰り返し行った組織的研究が、評価の枠を出ることができませんでした。評価項目が整った段階で研究を終えてしまい、それを通して児童生徒の主体性が育っているかどうかの視点で省察せず、指導と評価の一体化が実現できなかったのです。

田中先生の実践を、コミュニティ・オブ・プラクティス(E. ウェンガー著)を参考に、実践コミュニ

ティの視座で捉え直してみました。行事の見直しを行う教師と生徒のコミュニティと行事に取り組む生徒主体のコミュニティがありました。実践コミュニティを育成させる7原則を用いると、「やらない自由」は、「様々なレベル(コア・アクティブ・周辺)の参加を認める」に当てはまると考えました。どのレベルで参加するかについて自己決定へと導くこと。田中先生の報告にもあったように、生徒は自分の決めた立ち位置から、時にはいつもとは違った視点から行事に参加することを通して、全体を俯瞰できる力を高めることができたのではないのでしょうか。これも一つの自己調整力の発揮だと気付きました。主体的に取り組む姿を見取るときに、私たちはつい積極的な発言や行動に目が行きがちですが、児童生徒一人一人に内在している可能性を引き出すという関わりから捉えることを大事にしたいと考えました。

赤尾先生の実践では、体育の苦手なAさんの変容が印象的でした。全員参加の授業を実現するため、生徒が自己選択できる役割の設定、主体的にならざるえないグループ会議。「誰一人取り残さない全員参加の授業」は「生徒一人一人が活躍する舞台」へ、主語が教師から生徒へと移り変わりました。この変革を支えたのは、生徒の見取りを中心に据えた仲間との省察でした。赤尾先生は毎回U先生の授業を参観しに行きました。最後にはU先生から「今日は来ないのですか」と言われるほど信頼関係が築かれていました。

2日目のラウンドテーブルのクロスセッションで幼稚園の先生から「主体性に明確な答えはない。子

どもとともに問い続けていく」というお話を伺いました。答えを出すことをゴールとせず、問いが一人一人の子どもにとっての答えになっているのではないかと感じました。

ファシリテーターの方が「ここへは価値を塗り替

える、新しい価値に気付くために来るのだと思っている」と言われました。今回の Session はまさにそのような時間となりました。来年度から学ぶ教職大学院でどんな価値に出会えるか、今からとても楽しみにしています。

変わりながら、続けていく

福井県教育総合研究所 水澤 紀子

Zone C では、福井市東郷地区のおつくね祭の取り組みを題材に、持続可能なコミュニティとは何かについて語り合った。

ラウンドテーブルにはこれまでも参加してきたが、Zone C のコミュニティに加わるのは今回が初めてである。私自身、東郷地区の出身であり、毎年おつくね祭には子どもを連れて参加している。今回、ファシリテーターの富永先生から、おつくね祭に関する発表があると伺ったことが参加のきっかけとなった。これまで、地域はどこか自分にとって遠い存在であった。しかし今回、改めて“コミュニティ”について考えるよい機会になると思い、参加を決めた。

「おつくね祭」は、東郷地区の夏祭りで、今年度で 27 回を迎えた。運営の中心は「東郷ふるさとおこし協議会」のメンバーである。この祭の目玉は、祭の名前の由来にもなっている「おつくね」（おにぎりの方言）の無料配布である。2 日間で 3000 パック（6000 個）ものおにぎりが振る舞われる。人口 4000 人弱でここ数年ほとんど増減のない東郷地区だが、コロナ禍を経た最近、無料配布の列が年々伸びていると感じていた。

少子高齢化や行事の簡素化により、地域行事が縮小・消滅する例も多い中で、「おつくね祭」はむしろパワーアップしている。そして実行委員の皆さんが生き生きと活動しており、参加者も楽しそうである。その背景の一つに、協議会が 60 歳定年制を導入し、実行委員長も一年任期とするなど、役割を固定せず若手が参加しやすい体制を整えている点がある。「若手は挑戦し、中間世代はつなげて裁量を与え、シニアは支えて見守る」という関係性が築かれているのである。若手が挑戦できる環境と、それを支える先

輩たち。東郷地区のコミュニティには心理的安全性が確保されており、それこそが“変わりながら続いていく”秘訣だと感じた。

また、「負担感はないのか」という質問に対して、負担に思うことはあるが、それ以上に“楽しさが勝る”から続けられるのだと話されていた。子どもに楽しんでもらうため、今の子どもたちに合う形へと内容を変えていく。「子どものために」という志を大切にし、自分が子どものころ楽しかった祭を、受け継いだバトンとして次の世代につないでいく。長く続いてきた行事だからこそ、形を変えながら続けているのだと実感した。

ここ数年、学校現場では「働きやすさ」の実現のために業務改善が進められ、さまざまな業務の削減が求められている。しかし「負担になるものは全てやめればよいのか」と、私は常にもやもやしていた。今回の Zone C で、その答えが少し見えてきたように思う。視点は「子どものためであるか」「自分もやりたいと思えるか」という“志の共有”にあるのではないか。形を変えることも必要だろうし、思い切って一度やめてみるのもよいかもしれない。大事なことは自然と残り、伝統として子どもたち自身が受け継いでいくはずだ。

今年度の全国学力調査の質問項目の、「地域や社会をよくするために何かしてみたいと思いますか」という問いに 8 割以上の児童・生徒が「あてはまる」「どちらかといえばあてはまる」と回答している。子どもたちは地域のために何かしたいと考えているのだ。東郷地区では、大人たちの背中を見て育った子どもが、やがて大人になったとき、子どものために志を受け継ぎ、形を変えながら「おつくね祭」を続けていくのだろう。

福井大学連合
教職大学院
東京サテライト



沖縄県宮古島市
教育委員会・
沖縄県教育委員会
東京都三宅村教育委員会

DEAL

(Deep Active Learning)

教職員研修 & 宮古島ラウンド テーブル・コラボ研修

「教職の理論と実践の融合」をテーマに、教員研修の在り方を問い直し、子どもたちの学習観の転換を図り、子どもたちによる主体的な学びを支えるための専門職としての教師の学びを検討する。フィールドワークとラウンドテーブルを通じて、地域、職種、学校種を超えた参加者同士が対話し探究する。

2026 **8.20~21**
THU FRI

OPEN 8:40~ START 9:00-16:45

場所 沖縄県宮古島市内、宮古島市役所大ホール
8/21午前のみ、ハイブリット開催

対象 全国の教員、教育委員会、教育関係者、
大学関係者、一般企業、他

受講無料 | 定員 **100名**

申込 申込期間：令和8年6月15日～8月10日

※定員に達し次第締め切ります。



QRコードまたは下記URLのフォームにて申込み

URL： <https://forms.gle/ML5hLJdehqytUsi1A>



子どもたちの探究を手がかりとした、
教師としての力を育む協働探究
～教師の主体的で対話的、そして深い
学びを実践する道を描く～



8/20 Session1 フィールドワーク

宮古島探究コースの フィールドワーク

宮古島や伊豆七島（三宅島）の中学校の生徒たちが考案した「宮古島を巡るコース」をグループで廻ります。参加者はバリアフリー視点も含めた探究ポイントを加え、島を巡る新しい学びを共創します。

8/21 Session2 ラウンドテーブル

宮古島ラウンドテーブル

子どもたちの実践発表と探究コースの報告をもとに、子ども達の主体的・対話的で深い学びや協働探究について考察、共有します。また、相互の実践を語り、傾聴し、子ども達の学びを支える教師の学びのあり方を検討します。

8/21 Session3 フィールドワーク

島の小中学校跡地を巡る 実地研修と自己省察

大神島の大自然の中で、小中学校の校の跡地を巡り、教育とは何か、教師の喜びとは、学びの質とは何かを自分自身に問いかけ問い直します。これまでの自分と向き合い、省察しこれからの展望を開きます。

主催・福井大学連合教職大学院東京サテライト 共催・宮古島市教育委員会・教育研究所

お問い合わせ

福井大学連合教職大学院東京サテライト（千葉）



tokyo.satellite2020@gmail.com

福井大学連合教職大学院

福井大学・岐阜聖徳学園大学・富山国際大学
連合教職開発研究科

学部卒生対象のコース

授業研究・教職
専門性開発コース

確かな力と自信を持った 教師になる

教育実習とは違う長期インターンシップ

長期インターンシップ(1年目)・学校拠点プロジェクト研究(2年目)
に取り組み、2年間の長いスパンの中で教師の仕事すべてを学ぶ

現職教員とのネットワーク

福井県内・全国の現職教員と共に学び、教師としての生涯にわたる成長を支える確かな実践力と成長力を培う

国際性・外国語学力が磨ける

NIEへの短期留学、JICA教員研修との連携授業、海外教育機関との国際共同研究への参加が可能

NIE…シンガポール国立教育学院

令和9年度学生募集日程

【推薦選抜】

詳細は説明会で

説明会

オープンキャンパス(オンライン開催)

日時： 令和8年8月17日(月)

第1回

出願期間：令和8年9月3日(木)～9日(水)

入学試験日：令和8年9月18日(金)

第2回

出願期間：令和8年10月21日(水)～27日(火)

入学試験日：令和8年11月7日(土)

学部卒生対象のコース

(授業研究・教職専門性開発コース)
推薦選抜のオープンキャンパス

(オンライン)が
8月17日にあります。
ぜひお申込みください。



<https://forms.gle/2fjrKiiGCR1w16b8>

令和8年度学生募集日程

【一般選抜】

詳細は事前説明会で

説明会

事前説明会(オンライン開催)

日時： 令和8年11月22日(日)

第1回

出願期間：令和9年1月18日(月)～22日(金)

入学試験日：令和9年2月6日(土)

第2回

出願期間：令和9年2月8日(月)～12日(金)

入学試験日：令和9年2月27日(土)

学部卒生対象のコース

・授業研究・教職専門性開発コース

現職の方対象のコース

・ミドルリーダー養成コース

・学校改革マネジメントコース

一般選抜の事前説明会が
11月22日にあります。

申込受付期間

8年10月1日(木)～11月12日(木)



<https://www.ocans.jp/u-fukui?fid=aBNOu1M3>

福井大学連合教職大学院の7つの特徴

(福井大学連合教職大学院ホームページ <https://www.fu-edu.net/graduate> より)

- ★学部卒院生は年間を通じた実習を通じて、教師としての高度な協働実践力を身につけます
- ★現職教員院生は、所属校に勤務しながら、大学教員や同僚とともに学校の課題に取り組み、協働実践力の質を高めます
- ★今日的課題に焦点を当てた協働研究を支援します
- ★大学教員がチームでバックアップします
- ★大学教員は幼・小・中・高・特別支援の学校現場や県の教育研究機関へ出向きます
- ★学校行事等に配慮した集中的な講座を開設します
- ★全国の教職大学院や優れた実践とつながります

Newsletter は、教職大学院に関わる皆様の協力で作られています。

修了生の皆様もご自身の実践や近況について投稿してみませんか。

関心がある方は、

dpdtfukui_nl@yahoo.co.jp

までご連絡ください。



教職大学院 Newsletter No.208

2026.7.4 発行

編集・発行・印刷

福井大学大学院 福井大学・

岐阜聖徳学園大学・富山国際大学

連合教職開発研究科

教職大学院 Newsletter 編集委員会

〒910-8507 福井市文京 3-9-1